

## 黄庭堅積析

—年譜・世系と十七歳までの足跡

加藤 国安

はじめに

かつてわが国では、黄庭堅といえば「味噌・醤油」の類と称されるほど、必読の詩人だった。最近、蓬左文庫所蔵の駿河御讀本『豫章集』（外題、内題は『山谷詩集注』南北朝覆宋刊の室町時代の抄本、九行十六字）を入手し見てみると、毛筆で本文・割注を全筆写しているほか、欄外（天地とも）や行間に細字でびっしり書き込みがある。蓬左文庫の善本なのに研究は全くといってよいほど手が付けられてこなかった。黄庭堅の室町期抄物（原典への書き入れも含む）は、川瀬一馬『五山版の研究』に示されるように、ある程度まとまった数が存在するが、

蓬左文庫所蔵本のみならず、黄庭堅の抄物全体が漢詩研究としては未開拓のままといつてよい（一）。これらの抄物を見てみると、かつては相当な熱意でもって読まれた詩人が、今や世の脇に追いやられている現状はまことに残念である。たしかに難解な部分もかなりあるし、資料上の制約も大きいのが、当時の日本人をあれほど惹きつけ、また中国詩史において大きな影響力をもったこの人物について、いつかはその全体像を掴んでみたいものである。近年、中国では徐々に黄庭堅の詩学研究が進みつつある。だが断句を引いての議論が少なくなく、一篇の作品に丸ごと即した論旨の展開にはなっていない。引用句をして語らせる式の議論は、過去の「詩話」の体裁と同じ

だが、広い理解を得るには限界があるように思う。ために、黄庭堅の風貌に何ほどか親しく接し得たという印象を残すところまではなかなか至らない。黄庭堅研究をどのようにして進めるかは、各人によって多様な方法があつて当然だが、私としては一篇ごとの釈読を中心にして、それに関連する事跡や背景にも言及しまた分析するといふ基礎的作業に取り組みたい。これまで国内の訳注には、荒井健氏(岩波書店 一九六三)と倉田淳之助氏(集英社 一九六七)のものがあるが、その後の成果を取り込んでいく必要がある。龐大な典故を一つ一つ丁寧に読解し、さらに本文一篇の文意を確定し、ひいては诗情までも探る作業にはかなりの時間がかかるが、わずかずつでも報告していければと思う。

テキストには、中国古典文学叢書『山谷詩集注』(黄宝華点校 上海古籍出版社 二〇〇三)と、中国古典文学基本叢書『黄庭堅詩集注』(劉尚榮校点 中華書局 二〇〇三)を用いた。両「叢書」本は、ともに任淵「詩集注」、史容「外集詩注」、史季温「別集詩注」、謝啓昆「外集補」、および「別集補」からなり、その集と篇目

は同一である。小稿の掲げる各作品が、この両叢書本のどの集・篇目に収録されているかを、各詩末に示した。また文淵閣四庫全書本『山谷詩集注』(庫本「外集詩注」等と略す)、同『山谷集』(庫本と略す)の巻数を掲げる。

『黄庭堅全集』(四川大学出版社 二〇〇一 『全集』略す)は第一〜四冊あり、「正集」「外集」「別集」「続集」「補遺」からなる。各作品の収録される冊数およびその集名・巻数を掲げる。『全宋詩』第十七冊(北京大学出版社 一九九五)は、巻九七九〜卷一〇二七が「黄庭堅」一〜四十九になっている。各作品の収録される巻数・編数を掲げる。

年譜は『黄庭堅年譜新編』(鄭永曉著 社会科学出版社 一九九七)が優れており、これによる。その主要な資料は、『黄山谷年譜』(任淵『山谷詩集注』巻首目錄内)および黄芚『山谷先生年譜』である。それと詩注の編纂との関係について、近年、真蹟や石刻も含めた研究が報告されているが、ここでは言及せずにおく(2)。

また読解は「叢書」本を基本にし、主なものを選択して語注や解釈などを付した。任淵・史容等の注釈を再検

討しつつ、江西詩派および歴代読書人の黄庭堅理解を想定しながら読んでいく。右本の他にも適宜、潘伯鷹『黄庭堅詩選』（古典文学出版社 一九五七）、陳永正『黄庭堅詩選』（三聯書店 一九八〇）、朱安群主編『黄庭堅詩詞賞析集』（巴蜀書社 一九九〇）、黄宝華『黄庭堅選集』（上海古籍出版社 一九九一）などの注解を参考にした。

これら以外に独自に付け加えた語注もある。これらの中国の成果のほかに、前述のようにわが国の黄庭堅関連資料（古刊本―五山版、抄物、古活字本など）があるが、漢詩としての詳しい研究はほとんどなされていない（3）。貴重な文化財のため十分な収集・調査には限界があるが、関係機関よりマイクロフィルムからの複写を許可していただいたものを併せ見ながら、日本の黄庭堅受容の足跡も視野に入れつつ作業を進めたい。

なお小稿は、一部、大学院演習で扱った作品も含む。受講生は、齋藤正和・陳洲・竹内航治・花村昭紀・田中琴恵・金靄形の諸君である。

一年譜と黄氏世系―日本の古抄本をもとに

わが蓬左文庫の『山谷詩集注』（駿河御讀本、室町末頃の抄本）を見ると、冒頭に「黄陳詩集注序」「豫章後山註解序」が掲げられ、次にすぐ『山谷詩集注』巻第一が始まり、世系や年譜はない。一方、米沢蔵書本A『山谷詩集注』（室町末 抄本 十一冊）では、巻第一の前にかなり詳細な「資料彙編」のごときものが一冊分ある。その中に「山谷先生年譜」があり、以下のように記される（小稿で取り上げる十七歳までを掲げる）。

宋朝慶曆五年乙酉仁宗所位二十二年、是歳先生と、  
皇祐三年七歳、作「牧童詩」、同四年八歳、作「送人赴」  
「举詩」  
嘉祐六年十七歳、作「溪上吟」、外集「編年始」  
於「是歳」。

この「年譜」が何かをそのまま写したのか、自身の文章なのかは不明だが、記述は黄筮『山谷先生年譜』に

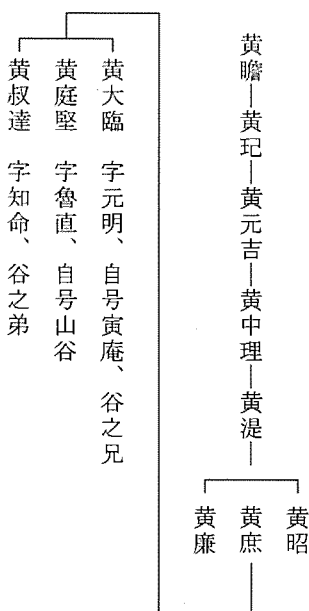
基づき正確である。また両足院蔵『山谷詩抄』（月舟壽桂・幻雲抄ともいう）も巻一の前に相当数のいわば「彙編」を持つが、同じくその初めに「山谷黄先生年譜」を掲げる（同系列の毛利洞春寺本にはなし）。それは次の通り。

慶曆五年西 仁宗廿二年、是歳先生と 慶曆六年 慶曆七年 慶曆八年 皇祐元年 皇祐二年 皇祐三年 七歳作牧童詩 皇祐四年 八歳作送人赴举詩 皇祐五年 至和元年 至和二年 嘉祐元年 嘉祐二年 嘉祐三年 嘉祐四年 嘉祐五年 嘉祐六年十七歳作 溪上吟、外集編年始於是歳（以下略）

何も事跡がない場合も、年号だけは列挙しているといふ違いはあるが、米沢本とほぼ同じである。なお別の米沢本B『山谷詩集注』（南北朝刊本による抄本）には「目錄」がない。両足院蔵五山版『山谷詩集注』にも「目錄」はないが、ただし、巻頭の「黄陳詩集注序」の眉欄に簡単な伝記が細字でびっしり書き込まれている。各作品ごとに事跡の記述があるのは当然である。一方、両足院『山

谷詩集注』（慶長・元和古活字版）には「目錄」があり、「年譜附」となっている。いわゆる「内集詩注」のそれである。もし「年譜」がなかったとしても、「伝」で代用するとか、あるいは年譜附きの他のテキストを併せ用いたこともあったであろう。何らかの形ではあれ、当時のわが国の知識人が、黄庭堅の年譜を見ながら作品を読解していたことは確かである。

次に「黄氏世系」だが、米沢本Aには「黄代世系」としてかなり詳細な系図が記される。今、人名の脇に記される簡単な経歴や統柄を略して掲げる。



しかし、米沢本B、蓬左文庫・両足院本（幻雲抄・五山

版・古活字版）・毛利洞春寺藏本には系図はない。この米沢本Aの系図が何によったかだが、天理大学所蔵『帳中香』（釈万里集九（正長元年 一四二八？））による山谷詩集の注で、古活字本、二十一冊（二十巻と叙部）。

巻二十の末尾に明応八年（一四九九）の自跋あり。慶長・元和頃には傍線を略した形ながら、氏名・経歴・続柄など全く同じ記述となっており、この本の主編者と思しき瓢庵（彭叔守仙、延徳二年）弘治元年 一四九〇）一五五五、東福寺・南禅寺で活動）自身が、巻頭に、『帳中香』を写した旨記す、その一例であると確認される。米沢本Aが貴重なのは、その後に各注家の名前を明記して、一々の考証を掲げている点である。ここでは、瓢庵のものを取り上げる。

瓢庵案左氏才九、文公十八年伝云、「昔高陽氏有才才八人。蒼舒・隲敷・樞戴・大臨・尅降・庭堅・仲容・叔達。

瓢又案夏文類聚新集廿一云、宋朝魯宗道、為右正言、夏有違誤、風聞彈疏、真宗稍厭之、一日自訴

於上前、願得罷去、上悅其忠、慰勉以遣、他日追念其言、御筆題曰魯直、言行錄 瓢謂魯直之二字、以為談助、雖然以庭堅字、不符号。

「隲」<sup>クワイ</sup>「尅」<sup>ハクウ</sup>は、瓢庵が二種の読みを記したものの、『古今事文類聚』『新集』巻二十一（元・富大用撰）にいう、「勉」等の送りがなの「メ」は、正しくは「メ」だが、ソフトの関係で入力できず仮に「メ」と表記した。「夏」は、「事」の異体字。右に記されるのは、黄庭堅の名前と字の由来についてであり、詳しくは後述する。それにして室町期における大陸の出版物の熱心な受容（4）、そして十六世紀にこの点に関してはや記述がなされていることに驚かされる。おまけに、「魯直」の典故は話としては面白いが、不適切とのコメントまであるのは鋭い。さて、系図がない諸本には、「山谷老人伝」（兩足院『山谷抄』・一韓智翹抄編―続抄物資料集成本）（5）、「豫章先生伝」（引用の末尾に「出于日抄」とある。兩足院『山谷詩抄』）が記される。なお米沢本Aは、この後「黄氏日抄豫章先生伝」と続き、宋・黄震『黄氏日抄』巻六

十五「黄涪翁文」中の「豫章先生伝」を写し、簡単な訓点を付す。今、同本より関係する部分のみを引く。

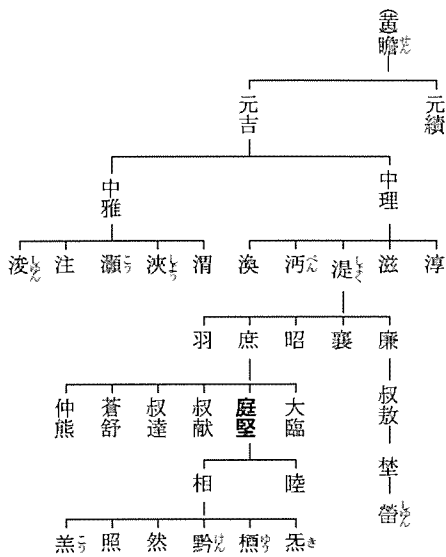
先生其先金華人、六世祖瞻、以策于江南、用為著作佐郎、知分寧県、瞻生玘、と生元吉、始小築水上、元吉生中理、——生湜、——生庶、嘗撰康州、実生先生、幼孤從舅李公扈学、登治平四年第一。

蓬左文庫本にはこの種の黄庭堅伝もなく、他とはかなり異なっている。その委細は、今後、作品ごとの内容から丁寧調査していく必要がある。ともかくも、日本の一時期、黄庭堅読解は今日からすると驚くほどの熱意をもって行われていた。その熱気を少しでも肌身感じながら、以下、黄庭堅の事跡をたどってみたい。

## 二 黄庭堅の事跡——最近の研究をもとに

江西の南昌から約四百里の所に小さな県城があり、その名を修水しゅうすいという。北宋の時には、修水は分寧ぶんねいと称されていた。分寧は山水に恵まれた所にあり、東北には龍門山・清水岩・旌陽山が、また東南には龍峰・南山・青銅岩が、西北には黄龍山・幕阜山・撰仙山・龍泉山、西南には石仏山・八疊嶺がある。峰々は険しく青くうっそうと茂り、あたかも天然の屏風のようにふさがり、この土地と住民を守っていた。さらに県の東南から回って蛇行する川があった。これが修水である。やがて鄱陽湖に注ぐ。山も水も清く、それが分寧を景勝地となしていた。ここが黄庭堅の郷里である。

黄庭堅の世系は、「叔父和叔墓碣」(『黄庭堅全集』「正集」第三十二)「叔父給事行状」(『全集』「別集」卷九)に詳しい。以下、これを中心に関連資料を補足しつつ概述する。その略系図は次の通り(6)。



言い伝えによると、五代のとき、黄瞻（黄庭堅の六世の祖）なる人物がいた。婺州（現在の浙江省）の金華の出身で、なにか事業を成し遂げたいと考え、郷里を離れて江南に遊学し、南唐に至った。そのころ南唐は地方の小国に甘んじていて、新興勢力の宋王朝の脅威に直面していた。そこで黄瞻は、自身の考えを当時の皇帝（李璟）に建言したところ、皇帝はその献策を採用こそしなかったが、彼の才識を称賛し著作佐郎を授け分寧の県令に就け

た。

黄瞻は、この分寧の地にあつて県令を二十年も務めた後、職を辞して湖南中部に家族をつれて遊びに出かけ、なにか役人の職でも探そうと思ったが、しばらくしても見つかることが出来なかった。彼の胸には、隠居しようという考えが湧いてきた。戦乱を避けて地方に落ち着き情勢がおさまるのを待つて、再び雄志を追い求めるのに分寧ほど理想的な所はなかった。かくして両親を奉じて家ぐるみ分寧に戻ることとし、以来、ずっと分寧に定住することとなるのである。

黄瞻には二人の子がいた。元吉（黄庭堅の高祖、礼部員外郎）と元績（建隆の進士、吏部侍郎）である。この点、右述した抄本のいう「瞻生玘」とは異なる。その理由だが、龍榆生『黄山谷年譜簡編』に、「宋刊『豫章黄先生文集』卷二十四「叔父和叔墓碣」に拠るに、「瞻元吉を生む」（とあり）「瞻玘を生み、玘元吉を生む」の説無し。当に依りて改むべし」とある。鄭永暁の『黄庭堅年譜新編』はこれに従っている。その元吉の人となりだが、豪爽で胆力と見識があった。元吉は出仕を願わ

ず、修溪に田畑を買って農耕を営んだ。その地は、県城の西二十里の南溪という修水の支流が流れる所で、二つの井戸があったことから、地元の人々はここを双井と呼んだ。ここのお茶を欧陽修が「草茶の第一」（『帰田録』巻一）と称えたほどである。黄元吉は災害の時には私財を抛出して郷を救っただけでなく、書を好んで集めた（『歐陽文忠公集』巻二十八「黄夢升墓誌銘」）。これが黄氏の中で蔵書を持った最初である。黄庭堅の高祖にあたる。

元吉の子が中雅（大理寺評事を追贈）と中理（黄庭堅の曾祖父、光祿寺正卿を追贈）で、ともに田中に隠棲し聞達を求めなかった。中理は父の意志を継いでその蔵書を基礎に、桜桃洞書院と芝台書院という二つの学堂を建設。書物は万巻を蔵するほどで、両院を訪問する遊子や来学者はいつも数十、数百人にも及んだという。中理が黄庭堅の曾祖父になる。

中理・中雅ともに五人の子がいた。それぞれ沔（別名・茂宗、字昌裔）・滋（字茂懿）・湜（字茂詢）・淳（字茂倫）・渙（字茂錫）と、灝（字茂先）・洙（字茂逸）・注（字

夢升）・渭（字子元）・浚（字茂実）である。彼らもその学問のよき薫陶を受け皆すぐれていた。「十龍」と称賛されたほどだった。そのうち七人が進士に合格、中でも中理の長子黄茂宗が重要である。

黄庭堅の祖父湜もその一人で、嘉祐二年（一〇五七）の進士である。のち子の廉をもって朝散大夫を贈られている。書にたくみで「遺教經」および蘇靈芝の「北岳碑」などは、「字法清勁で、筆意皆到るも、但だ俗人の眼に入らざるのみ」（『全集』「外集」巻二十三題跋「十棕心扇を書し因りて自ら之を評す」と称えられた。

湜の弟に淳がいる。宝元元年（一〇三八）の進士で、官は太常寺少卿に至った。黄庭堅の「叔祖少卿の奕棋を観る」詩（後出）の叔祖である。また湜の従弟黄注（黄庭堅の叔祖）は、欧陽修の友人だった。天聖八年（一〇三〇）の進士で、永興・公安・南陽の主簿を歴任したが、志を得ないまま宝元二年（一〇三九）四十二歳で卒した。黄庭堅は注を尊崇し、その風貌について「清談落筆 一万字／白眼 拳觴 三百盃」（「方城を過ぎりて七叔祖の旧題を尋ぬ」『全集』「外集」巻十七）、「叔祖夢升 是



の時 年四十／文章 一世に妙／歐陽永叔 其の才を愛し／之を称えて口を容なごらず」（「七叔祖主簿と族伯侍御の書に跋す」）「別集」（卷六）、「叔祖夢升、学問文章、五兵縦横たり。制作の意は、徐陵・庾信に似たり」（「歐陽文忠公、七叔祖主簿の墓誌を撰するの後に跋す」同）等と記している。

湜には五人の子がおり、一人が黃庭堅の父の庶（字は匪父、知康州事）で慶曆二年の進士である。昭しやうと廉れんもそれぞれ慶曆六年と嘉祐六年に進士合格、それぞれ監察御史と吏部給事中に就いている。さらに襄と羽がいる。湜の妻を劉氏といい、人々は仙源君と称した。黃庭堅の禪に影響を与えた人物の一人である。

黃庶は仁宗の慶曆二年（一〇四二）に進士となった。時に二十五歳。黃庶の妻は、江西の建昌の名門李東の娘であり、「大理丞知康州・黃庶の妻、集賢校理佐著作・庭堅の母なり」と記される。黃庶との間に、五人の子と四人の娘がいた。順に、大臨・庭堅・叔猷・叔達・仲熊である（『後山集』卷十六「李夫人墓銘」）。四女はすべて妹で、それぞれ長女は南康の洪民師、次女は眉州の陳さく、

三女は王純亮、末妹は張はな墳の妻となった。

なお李東には、李布・李常・李莘らの子がおり、博学多識の者たちばかりだった。ことに叔父の李常（字は公扆、のち御史中丞）が黃庭堅に与えた影響は大きかった。蘇軾の友人でもあった李常は、若い頃、廬山の五老峰の僧舎で学び、写した書は数万巻に及んだ。後に及第し世に出てからは後学の者に使ってもらうべく僧舎に寄贈。その仁者の心に蘇軾は感じ入っている（『蘇軾文集』卷十一「李氏山房藏書記」）。その鈔本は数九千巻あり、「李氏山房」と呼ばれたという（『宋元学案』卷十九「范呂諸儒学案」中の「龍学李公扆先生常」）。また娘は数人おり詩文をよくし、書画に通じていた。

### 三 父庶の健在期―神童の誉れ高く

以下、黃庭堅の事跡を追って関係する主な作品を訳解することとする。



黄庭堅、聡明で学問を好み、『五経』をそらんじた。ある日、黄庭堅は師に「世間では六経というのに、なぜ私たちには五経を読ませるのでしょう」と尋ねた。師は言った。「『春秋』は読むに足らないからじゃ。」「でも経というのに、なぜ読むに足らないのですか。」そこで黄庭堅は『春秋』を読んでみた。十日ですべて暗記してしまい、一字も残さなかった。恐るべし、その記憶力。父黄庶はこれを奇とし、息子を神童科に進ませようとしたのである（『道山清話』『百川学海』癸集所収）。

文彦博、前年（慶暦八年 一〇四八）より礼部侍郎平章事となる。この文彦博が黄庶の仕えた人物だった。またこの年、知青州・富弼、礼部侍郎となる。黄庶、許州の幕にあり。

○仁宗・皇祐三年辛卯（一〇五一）、七歳  
叔父の李常が黄庭堅の家に来た折、書架に乱雑に置かれた本について、その一冊を手に取り彼に訊いてみたところ、知らないものはなかったので、「これは一日、千里を行くだ」と驚いた（『宋史』卷四四四本伝）。黄庭堅

はこの叔父を深く敬愛するようになる。またこの頃からすでに詩をよくした。「牧童詩」あり（『桐江詩話』第二条『宋詩話全編』第十卷所収）。

### 「牧童」

騎牛遠遠過前村 牛に騎り 遠遠として 前村を過ぎ  
笛吹風斜隔壠聞 笛吹き 風斜めにして 壠こうを隔てて聞こゆ  
多少長安名利客 多少の長安 名利の客  
機関用尽不如君 機関 用い尽くすも 君に如かず

長安の名利の客人らがどんなに知略を尽くそうが、日が昇れば野に出、落ちれば笛を吹きながら帰る、一介の牧童に及ばぬというもの。「長安名利」は、白居易の「長安名利の地／此の興 幾人か知る」（「首夏、諸校正と共に開元観に遊び因りて宿して月を玩ぶ」詩）などが表面上は似るが、意味的にはむしろ「戦国策」卷三の「名を争う者は朝に於いてし、利を争う者は市に於いてす」の趣である。この詩が、後の崇寧元年（一一〇二）黄庭堅五十八歳、苦境の中から生まれた「李亮功が（秘蔵する、

晩唐のたいすう戴崇の牛図に題す」詩にいう、「乞う 我が一  
牧童の／林間に 横笛を(吹くを)聴かんことを」の基と  
なる。

この頃、父・黄庶は文彦博の要請で許州の宋祁の幕に  
任じられていた。

○仁宗・皇祐四年(一〇五二)、八歳

宋・蔡條『西清詩話』(『宋詩話輯逸』上巻第百条  
郭紹虞編)によると、この年、黄庭堅は「人の拳に赴く  
を送る」(「別集詩注」巻上)を作っている。同郷の人が  
いざ試験に赴くのを見送った詩。

「送人赴拳」

青衫烏帽蘆花鞭 青衫 烏帽 蘆花の鞭

送君歸去明主前 送る 君 明主の前に歸去せるを

若問舊時黄庭堅 若し旧時の黄庭堅を問わば

謫在人間今八年 謫せられて人間に在ること

今八年と

「今八年」は、本詩が八歳の作とされる根拠。知人が  
晴れがましい舞台に向けて旅立つというのに、己は人間  
世界に謫されて今年で八年になると言うのは、その早熟  
ぶりに度肝を抜かれるほどだ。ちなみに、宋・吳炯『五  
総志』(『知不足齋叢書』第廿一集)では、「責められて  
人間に在ること十一年」(責在人間十一年)に作る。また  
第一句は『五総志』によるもので、『西清詩話』になし。  
史容はもともと三句のみと解し、『毛詩』「麟之趾」「甘  
棠」にならった古法との説。しかし、黄宝華は強引な解  
釈とする(上海古籍出版社『山谷詩集注』点校、同氏『黄  
庭堅評伝』)。

父は許州からずっと文彦博に従って青州に移った。な  
お王安石が「老杜詩後集序」をものしたのは、この年の  
ことである。李常は王安石と親しかった。

○至和二(一〇五五)年、十一歳

父・黄庶、文彦博の推薦で知康州(今の広東省徳慶)に  
就任。黄庭堅はそのまま残り、祖母劉氏のもとで勉学に  
励んだと思われる。祖母は仏教を信奉。当時、洪州には

百を下らない寺院があった。分寧県だけでも、數十寺院があった。中でも分寧の「六大禅院」は、黄龍院・法昌院・興化院・兜卒院・雲岩院・宝山院であり、黄庭堅も祖母に連れられて出かけたことがあっただろう。「実に惟う先君の恩」（「祖母桃源太君劉氏忌日齋僧」『全集』外集卷二十四）とある。

また呂本中の書にはこう記す、「范元実、嘗て謂えらく、「黄魯直の禅は祖母仙源君に学ぶ」と。曰わく、「魯直の参禅は常人より別高し」と。仙源君言わく、「汝の言う所の如し。除是（俚語で「ただ」の意）両（私と孫）の佛有るなり」と（『東萊呂紫微師友雜志』（8）。

○仁宗・嘉祐二（一〇五七）年、十三歳

この頃、黄庭堅より二歳年長の王肱と交わる。「吾が友力道、諱は肱。庭堅、童子の時、力道と遊ぶ。是の時、恭陸先生（肱の父）尚お恙なく、入るを得るに崔夫人を堂に拝せしむ。両孺子の共に学問し相愛するを以ての故に両家親しく亦た相愛す。力道、予より長ずること二歳、少くして独立を成し、兒子の気無し。食飲臥起に書史筆墨

と俱にす。後七年、比歳、郷举士を以て俱に京師に集まり、甲辰（治平元年 一〇六四 王力道）・丁未（同四年 黄庭堅、進士に合格）歳相従うなり」（「王力道墓誌銘」『全集』正集卷三十一）という。

○仁宗・嘉祐三（一〇五八）年、十四歳

黄庭堅の父・黄庶、康州で世を去る。四十一歳。至和二年より知康州を務め、儂智高の反乱により困窮した民政の立て直しに尽力した。著に『伐檀集』がある。庶は「詩賦を以て第一を得たり」（『伐檀集』自序）というように、詩文の才に恵まれていた（9）。彼の詩風についてごく簡単に述べるならば、杜甫や韓愈に多く学んでおり、その高妙な詩風は黄庭堅の源流となったといえる。またその人となりも剛直で節を曲げてまで人に仕えることを欲せず、結局、出仕も意を得ぬまま中年で亡くなったのである。

李常が康州へ趣き、棺を郷里に運び双井に葬った。一家は十数人を抱えて貧困となり、「私田 苦だ薄きに王税多く／諸弟は寒さに号び 諸妹は瘦せたり」（「家

に遷り伯氏に呈す」詩「外集詩注」卷一、「庭堅 少わかくして孤 衣食に窘くろしむ」(「李幾仲に答うる書」『全集』正集卷十八)という窮状に陥った。当然、黄庭堅の今後についても話し合われたことだろう。

ある人が子供に勉学させるよりも働かせた方がよいのではと勧めたが、李夫人はこれまで貧乏でなかったためにはないと行って、あえて子供に勉強をさせたのだった。

「康州卒す。子稚にして貧し。夫人、喪(礼)を以て豫章に還葬し、子をして学に就かしむ。或ひと勧むるに利を以てするも、夫人曰く『我が家(実家の李家)及び児の父(黄庶)の時より、未だ嘗て貧ならざるはなし。何ぞ用つて利せんや』と」(「李夫人墓銘」(『後山集』卷十六)。

#### 四 叔父・李常のもとへ

—黄庭堅の学問・人格形成の源泉

○仁宗・嘉祐四(一〇五九)年、十五歳

庭堅、この頃、淮南に遊学す。(「庭堅、年十五六の

時、淮南に遊学す」とある。「王子予の外祖劉仲更の墨蹟に跋す」『全集』別集卷八)。叔父李常が権宣州觀察推官、監漣水軍となっていた(宣州は安徽省宣城県、漣水は江蘇省漣水県)のを頼ったのである。

黄庭堅はこの叔父について、「我、少わかくして不天(天佑がなく)、殆ど埋替(埋もれ捨てられる)ならんと欲するに、我を長ちやうじ我を教ゆるは、実に惟ただだ舅氏なり。四海の内、朋友比肩し、舅甥相知り、卒つひに間然無し(非の打ち所がない)」(「舅氏李公扱を祭る文」『全集』正集卷二九)、「往かへて舅氏の旁らに在りて／獲拚かくへんす 堂上の帚(身の回りの世話をするの意か)／六経に 聖人を観／明如として 夜 斗を占う」(「明発を用もちて寐ねず」其五「外集詩注」卷三)と記す。そして四年間をこの叔父のもとで過ごし、学風や人間形成に大きな影響を受けるのである。

黄庭堅自身、その詩に、「少わかくして母の家に長じ／学海 頗る尋ね浴う／諸公 舅に似るを許す／賤子(自身のこと) 豈に能く賢ならんや／轅駒えんこ 推挽を蒙り／官次 丹鉛(校書のこと)を奉ず」(「公扱舅氏の呂道人

研を送る長韻に和し奉る」「外集詩注」卷十五)や、「外家に金玉有りて、我が躬を道術に之かしめ、我が家の徳心を衣食させる有りて、我をして俗学の市より蟬蛻し／仁人の林に鳥哺せしむ／生を養ひ親に事え 汔ぼどんど古を師とし／玉を炊かぎ桂を爨かぎ 能よく今に至る」(同「再び公叔舅氏の雑言に和す」と記す。たまたま叔父の家に経済力があつたから、それで学問の道へ進ませてもらい、また徳心を第一義として日々身につけることを教えられ、高い教養を修めることができたのだという。

「外家 明徳を秉とり／晚に世と参差たり」(「庭堅、邑を太和に得たり。六舅、節を按じて同安に出づ。(元豊三年)皖公溪口(安徽省安慶市)に邂逅す。風雨の阻み留めること十日、榻を対し夜語す。寄せて十首を呈す」其一「外集詩注」卷八)。外家は母方の家の意、つまり李常のこと。「四海 広からざるに非ざるに／甥舅 最も相知れり」(同 其二)。世間は決して狭いわけでもないのに、やはり叔父と自分が最大の知友だという、この句ほど二人の親密さを端的に表わしたものはあるまい。

「宅相を成す能わず／頗る舅の固窮に似たり」(同

其三)。「宅相」は、『晋書』魏舒伝の故事。身寄りのない魏舒が外戚の家に世話になつていたが、ある時、家を建てることになり家相を見てもらつたところ、魏舒は家に置いておくべきでないと言つたため、身を退いたというもの。ここでは、黄庭堅がその魏舒のようにはできなかったという意味。住み込みの居候をせざるを得なかつたのだが、次句に「頗る舅の固窮に似たり」というように、その結果、実の子同然の親密な関係ができるのである。「(叔父の)文章は 甥せいしゆ侄しゆに被り／孝友は 婦女を諧ととのう」(同 其四)は、李常という人物の人徳の大きさを物語る。

ある日、庭堅はこういう、「江都 家を克かむる才／万卷 書 架に挿す(願ひ言う 渠かの出仕を舅に従ひ 耕稼を問う」(同 其五)と。官界への競争は熾烈である。都会にはよく家を治めるような才人が多いし、おまけに書籍もたくさん所蔵している。そんな中、自分も世間の人のように役人になりたいと願ひ出て、叔父に農作業(こは学問の意)をみっちり教わつたのだという。「願言 渠出仕」の意、仮にこう読んでおく。「我を教えるに羊

を牧する如く／更に後おくるる者の鞭を著く」(同 其十)は、もとは『莊子』達生篇による表現で、内面と外面いずれにも傾かず、中央に立ち無心にあるのが人生の達人だという意味だが、それを少し変え、叔父は自分をやさしさの中にも、またきびしさを忘れずに指導してくれたというような意味に仕立て直している。黄庭堅の典故活用の一例である。

「索居して 旧聞を廢し／独学して 新たな友無し」(前掲「明発を用て寐ねず」其五)。これまで聞いた説や旧来の学問を廢し、ひとりて根本から学び直し新たな友を持つ余裕はなかったという。『礼記』『学記』に、「独学して友無ければ、則ち孤陋にして寡聞」とあるが、ここでは文脈的に「孤陋にして寡聞」の意はなく、むしろそうした孤独の危うい淵にも耐えて徹底的に勉強し、その負を克服して成果を得たという意である。この種の典故の転用は、黄庭堅の大きな特色である。

かくして、『宋元学案』卷十九「范呂諸儒学案」には、「山谷」先生、蘇門の学士と称すと雖も、然して其の学行を考うるに、実に之を李公扨に本づく」と、叔父・甥

の間での学問の系譜が記されるのである。『宋元学案』同箇所には、「(李常は)子婦諸女侍側をして、為に孟子の大義を説かしむ」と、彼が日頃の暮らしの中でも家族ともども徳義を大切にしていた様子が描かれている。

黄庭堅は先生の日常もよく観察していた。「公扨先生は、疏通にして遠大の君子なり。…細かに其の内行を觀るに、冰清く玉潔く、金珠を視るに糞土の如し。未だ一物にも凝滞を始めず」(「李公扨の書に跋す」『全集』別集卷六)というふうには、先生はささいな物にさえ欲得の心を持たなかったのである。蘇軾はいう、「怪しむに君の一身 都て是れ徳なるかと／之に近づけば 清潤肌骨に淪すむ」(「舒教授の李公扨に寄せるに次韻す」『蘇軾詩集』卷十六)と。全身これ徳、清潤の気また肌骨に深く埋もれているような人物なのである(10)。まさに李常こそ黄庭堅の導師だったといえよう。

そればかりではない、後には不得手な官界に入るのに、叔父はいろいろ世話を焼いてくれるのである。いわく、「輓えん駒 推挽を蒙る」(前掲「公扨舅氏の呂道人研…」)と。輓駒は、窮屈な官界の意。そこは庭堅にとって辛酸



の空間だった。「舅氏は知る 甥の最も疏懶なるを、腰を塵土に折るに 哀憐を解す」(「次韻して滑州の舅氏に寄す」)と。叔父はこの甥が非常にだらしのない人間であることを知っておられる。役人暮らしに不向きで腰を折るのが嫌で、その度に私は悲哀を味わっているというのである。

○仁宗・嘉祐五年(一〇六〇)、十六歳

「溪上吟并序」

春山鳥啼、新雨天霽。汀草怒長、竹篠交陰。黃子觀漁於塘下、尋春于小桃源。從以溪諸童稚子哇丁三四輩。茶鼎酒瓢、淵明詩編、雖不命戒、未嘗不取諸左右。臨滄波、拂白石、詠淵明詩數編。清風爲我吹衣、好鳥爲我觀飲。當其溼然無所拘繫、而依依規矩準繩之間、自有佳所。乃知白蓮社中人、不達淵明詩意者多矣。過酒肆則飲。亦無量也。然未始甚醉。蓋其所寓、與畢卓劉伶輩同、而自謂所得、與二子異。人亦殊未能知之也。酒酣、得紙書之、爲溪上吟。

「溪上吟 并びに序」

春山に鳥啼き、新雨 天霽る。汀草 怒長し、竹篠交ごも陰をなす。黃子は漁を塘下に觀、春を小桃源に尋ぬ。從ふるに溪童・稚子・哇丁ら三四輩を以つてす。茶鼎・酒瓢・淵明の詩編は、命戒せられずと雖も、未だ嘗て諸を左右に取らずんばあらず。滄波に臨み、白石を払い、淵明の詩 數編を詠ず。清風は我が爲に衣を吹き、好鳥は我が爲に飲を勧む。其の溼然として拘繫せらるる所無きに当たり、而も規矩・準 繩の間に依依たるに 自ら佳所有り。乃ち知る、白蓮社中の人、淵明の詩意に達せざる者多しと。酒肆に過れば則ち飲む。亦た量無きなり。然れども未だ甚だしく酔うを始めず。蓋し其の寓する所は、畢卓・劉伶の輩と同じきも、自ら謂えらく、得る所は、二子と異なれりと。人は亦た殊に未だ之を知る能わざる也。酒酣にして、紙を得て之を書し、溪上吟と爲す。

○新雨天霽—宋玉「高唐賦」(『文選』)に、「天雨の新たに霽れ／＼ひやく／＼谷(水)の俱に集まるを觀る」とある。○怒長—勢いよく

生長する。『莊子』外物篇に「春雨 日時にありて草木怒生す」。

史容の注に、僧善権「桃李 紛として已に華たり／筍蕨 俱に怒長す」とあり。『全宋詩』（未収録）、『全宋詩訂補』積善権に「二首あるも、該当せず。また『声画集』の中に逸詩七首が残るが該当せず」胡繩『黃庭堅年譜新編』付録三の善権の解説には逸詩九首とするが、二首は未確認。しばらく措く。僧善権は、姓は高、字は異中。江西詩社宗派図中の一人。惠洪や謝逸らと交流があった。『真隱集』三巻があるが亡逸。『宋僧著述考』（李国玲編 四川大学出版社 〇七）にも委細言及なし。また史容は掲げないが、唐・喬琳「慈竹賦」（『歷代賦彙』正集卷一一八）に、「叢篁 劈開し、芽筍 怒長す」とある。○黃子—黃庭堅自身のこと。

○小桃源—小さな桃源郷。○溪草—溪筋で暮らす子供供の意か。

あるいは溪蛮の子供とも。○畦丁—杜甫「豎子を駆りて蒼耳を摘ましむ」詩（『杜詩詳注』巻十九）に、「畦丁 勞苦を告げ

／以て日夕（の食事）に供する無し」という。畑仕事をやる男子。

○陶淵明—この「溪上吟」は、陶淵明「斜川に遊ぶ詩」などにならったものだろう（史容になし）。その序にいわく、「天氣澄み 和かに、風物閑かにして美しく、二三の隣曲（隣人と同に斜川に遊ぶ）」と。○命戒—説論すること。○左右—そば、

かたわらの意。○清風為我—杜甫「四松」詩に、「清風 我が

為に起り／面に漚いで 微霜の若し」とある（史容になし）。

○好鳥—歐陽修「啼鳥」詩（『全宋詩』巻二八四）に、「花は能く嫣然として 我を顧みて笑い／鳥は我に飲むを勧めて 情無きに非ず」という。黃庭堅が歐陽修に学んでいた初期の例。熙寧六年、黃庭

堅（二十九歳）が二度目に結婚した謝氏は、歐陽修の妻の姉妹（謝景初の妻の娘にあたる。つまり義母が歐陽修の妻と姉妹関係にある。この句は、黃庭堅が若い頃、歐陽修に学んでいたと思われる痕跡の一例。○溲然—変化する様。○依依—離れにくい様。○

規矩準繩—計測のための道具。ここでは社会の法則の意。○白蓮社—東晋時代の有名な仏教結社。陶淵明と少し交流があった。

「遠法師（惠遠のこと）、諸賢と蓮社を結び、書を以て淵明を招く。淵明曰わく、〈若し飲むを許さば則ち往かん〉と。之を許す。遂に進る。忽ち眉を擗めて去る。」（佚名「蓮社高賢伝」）

○酒肆—酒場。○畢卓—劉伶—ともに晋の人。無類の酒好きで豪放、酒ゆえの奇行も 有名。

おお、春の山に聞こゆる鳥のさえずりよ。上がったばかりの雨の後には、まぶしい空の輝き。みぎわに萌えし小草は、おのが身を爆発す。竹と笹の奏でる、この柔らかな緑陰のハーモニ—。

目に見ゆるは、塘のあたりにのんびり漁をする者らの

影。この春の中、いざ桃源郷をば訪ねん。連れは、溪筋の童や少年・若い農夫など三四人。

茶釜、酒のふくべに、「陶淵明集」。それらは、いわずもがなしつかり携帯。清き水の流れに臨み、岸辺にまろぶ白き石のよきをば選び、塵を払いて腰下ろさん。かくて思い出づるままに、淵明が詩を数編吟ず。するとわがために、清き風も爽やかにわが衣を吹き、よき鳥のまた愛くるしき声にて、いざ杯を上げよとさえずる。

川の流れのたえず変わるが如くどれほども囚わるるなく、また世の習いより少しも離るることなし。ああ、この間にぞ人生の妙味はあらん。(もしこの世を捨つれば、かくのごとき喜びはなきものを。)さればこそ知る。陶淵明も交わりしかの白蓮社の僧らの、陶詩理解の深からざりしを。

酒屋をよぎればすぐ酒よ。量はかぎりなし。なれど泥酔はまだしておらぬ。酒に託した思いは、稀代の酒好き畢卓・劉伶らの同類なるべし。が、みずから思うに、彼らのなせしこととは異ならん。人は、わが酒の思いをぞ知るなけれ。

いよいよ酒もたけなわ。紙を得てわが思いを書きつづり、「溪上の吟」とぞせん。

(古い言葉にも いうように)

人生は はかなし

誰か 長寿を得ん

いささか 暇な時 見つけ

骨休めと 決めこむべし

門を出で 高き丘 眺むれば

墓地の上の 高い木々に

春のつる草 伸び放題

試みに ふるい過去帳

めぐり見れば すぐ知れること

酒 楽しまぬ死者の 多きを

酒 断つたとて よもや

かの南山のごとく 千年も

命永ろう わけもなし

短生無長期

聊暇日娑婆

出門望高丘

拱木漫春蘿

試爲省鬼錄

不飲死者多

安能如南山

千歳保不磨

在世崇名節

飄如赴燭蛾

及汝知悔時

萬事蓬一窠

青青陵陂麥

妍暖亦已花

長煙淡平川

輕風不爲波

たとえ この世で

無人按律呂

名譽 忠節 大事にするも

好鳥自和歌

その命 燭しよくに飛び込む 蛾がのごとし

杖藜山中歸

君が 後悔くわいごということ

牛羊在坡陀

知った時には すべては野に生ゆる

本自無廊廟

一抹いちまつの蓬よもぎくさ草くさと なり果つる

政爾樂澗阿

念昔揚子雲

おお 何という青さ

刻意師孟軻

春の丘陵になびく 麦の穂よ

狂夫移九鼎

さらには 見事なあでやかさ

深巷考四科

つとに咲き匂う 花たちよ

亦有好事人

遠くまで霞む もやは

時能載酒過

うっすらと 平らな川と溶け合つて

無疑舉爾酒

軽やかに吹く 風は

定知我爲何

そよりとも 波も立てず過ぎていく

われらが中には

短生 長期無し

楽器 奏でる者はなし

聊いささか日を假かりて 婆娑ばさたり

されどよき鳥が向こうから

門いを出いでて 高こう 丘きゅうを望のぞめば

楽しい合唱 聴かせてくれる

拱きやう木ぼく 春蘿漫しゆんらまんたり

アカザの杖 つきながら

試ためみに為ために鬼録きろくを 省かえりれば

山歩きから 帰る頃

飲いづまずして死しする者多おほし

牛羊は 斜面になおもおる

安いづんぞ能よく南山なんざんの如ごとく

われは もとより政界に

千歳せんざい 不磨ふまを保たもつ

羽ばたく心 つゆほども

世よに在ありて 名節なせつを 崇たごぶも

ただ山水に 遊ぶのみ

飄ひようとして燭しよくに赴むかひ蛾がの如ごとく

ああ 昔の揚雄 思い出す

汝なん海うみゆるを知る時に及びては

鋭意 孟子を師と仰ぐ

万事ばんじ 蓬ほう一窠いつか

狂人きやうじん王莽 帝位を奪うも

姪せいせい暖なんたり 亦また己おのれに花はなさく

揚雄先生 路地裏の家で

長ちやう 煙えん 平川へいせんに淡たんく

せつせと 学問しておった

輕風 波なみを為なさず

そんな中 酒持つて 先生宅を

人の律りつ呂りよを抜ぬける無なく

訪れた 物好きもいる

好こう 鳥ちよう 自みづから歌うたを和わす

訪れた 物好きもいる

藜あかぎを杖つゑつきて 山中やまより帰かへる

訪れた 物好きもいる

牛羊 坡陀はたに在あり

(人生) そういうわけなんだ

本ほんより 自おのづから 廊ろう 廟びやう無し

さあさ 躊躇ちゆうちゆうせず

政まさに爾たた 澗阿かんあに樂たのしむの

汝の杯をば 挙げようぞ

さだめし 余が何者か

よくよく分かるだろうて

念<sup>おも</sup> 昔<sup>やうしやうん</sup> 揚子雲

刻意<sup>こくい</sup> 孟軻<sup>もうか</sup>を師とす

狂夫<sup>きやうふう</sup> 鼎<sup>てい</sup>を移すも

深<sup>しん</sup> 巷<sup>こう</sup>に 四科<sup>しか</sup>を考<sup>かう</sup>う

亦た好事の人有り

時に能く酒を載せて過ぐ

疑<sup>ぎ</sup>う無く 爾<sup>に</sup>が酒を挙げん

定めて知らん 我<sup>われ</sup>の何<sup>なに</sup>為<sup>な</sup>るやを

○短生—晋の陸機「歎逝賦」(『文選』)に、「嗟<sup>あ</sup>、人生の短期は／執

か長年 能<sup>よ</sup>く執<sup>と</sup>(保つ)の意<sup>い</sup>たんや」という。史容の注に、この

句を引いて「天台賦」とするが、「御定歴代賦彙」に見えず。誤り

か。○假日—暇を借りる。屈原「離騷」に、「聊<sup>か</sup>か日を假<sup>か</sup>りて以て嬉楽せん」、また王粲「登樓賦」に、「聊<sup>か</sup>か日を假<sup>か</sup>りて以て憂いを銷<sup>け</sup>す」(『文選』)等という。○婆娑—安んじて落ち着く様。

○拱木—高い木。墓に植えた木。梁の江淹「恨賦」(『文選』)

に、「試みに平原を望めば／蔓<sup>まん</sup>草<sup>そう</sup>は(死者)の骨に祭<sup>まつ</sup>り／拱<sup>こ</sup> 木は魂<sup>たま</sup>を斂<sup>おさ</sup>む」とある(史容の注になし)。○漫—はびこる。みなぎ

る。○春韮—春のつる草。○鬼録—過去帳。○不飲—欧陽

修「聖俞(梅堯臣のこと)の飲酒する莫<sup>な</sup>かれに答<sup>こた</sup>ふ」詩に、「古自

り飲まずして死せざる無く／惟<sup>た</sup>だ善<sup>ぜん</sup> 有<sup>あ</sup>るのみにては(死を)遅く

すべからず」という。梅堯臣も、後に黃庭堅の妻の謝氏の縁類筋にあたることになる。すなわち岳父謝景初の父謝緯の姉妹が梅堯臣の妻である。ちなみに梅堯臣と歐陽修は、謝景初から見て伯叔母の夫が梅堯臣で、妻の姉妹の夫が歐陽修という関係になる。

黃庭堅も後にこのような姻戚関係になるとは、不思議な縁と感じられたであろう。黃庭堅の梅堯臣・歐陽修に対する敬愛の念はこのほか強い。たとえば、「余、三十年前、聖俞の詩句の高妙なるを歎慕す。未だ識面に及ばずして、聖俞の下世せらる。…元祐五年正月二十一日 黃某題」(『聖俞の歐陽晦夫(梅堯臣)の門人・歐陽闢のこと』に贈る詩に跋す)『黃庭堅全集』「別集 卷八」とある。元祐五年の「三十年前」とは、ちょうど嘉祐五年にあたる。

すなわち本詩が書かれた年である。○南山—終南山(陝西省西安の南方の山)のこと。「詩經」小雅に「南山の寿<sup>じゆ</sup>きが如し。鶯<sup>あ</sup>けず崩れず」とある所から、不老長寿のシンボル。○不磨—不滅に

同じ。韓愈、窮を送る文に、「人生まれて一世、其の久しきこと幾<sup>いくばく</sup>何ぞ、吾、子(貧乏神のこと)が名を立てて、百世に磨<sup>ま</sup>せざらしめん」という。○名節—名譽や節操。『漢書』「游俠伝」の「樓護伝」に、「人と為<sup>な</sup>り 短小にして精弁、論議は常に名節に依れば、之を

聴く者 皆<sup>すく</sup>竦<sup>すく</sup>む」とある。○飄—ひるがえる様。○蓬—窠—一株のヨモギ草。李白の「道を安<sup>あん</sup> 陵<sup>りやう</sup>に訪<sup>ま</sup>ね…」詩に、「昔日

一

株

の

ヨ

モ

ギ

万乗の墳／今一科の蓬と成る」という。○陵阪―丘

陵。杜甫の「喜晴」詩に「青霭(青く輝く様)たり。陵阪の麦／

窈(よう)窕(たう)たり。桃李の花」(『杜詩詳注』巻四)という。○妍暖―

あでやかで温もりがある様。○長煙―長くたなびくもや。○

律呂―音程。また音楽一般の意。○坡陀―斜面。○廊廟―朝

廷。ここでは官界ではばたく志の意。○政爾―正にた。『正

爾』に作るものもある。○澗阿―曲がった谷川。○揚子雲―

漢の揚雄(前五三―一八)のこと。子雲は字。孔子・孟子の道を

継ぐことをもって任じた。○刻意―銳意に同じ。○孟軻―孟

子のこと。軻は本名。○狂夫―王莽(前四五―二三)のこと。漢

朝末期の宰相だが、皇帝を弑し国を篡奪したので「狂夫」と呼ん

だ。○九鼎―夏殷朝より伝えられる鼎で、帝位のシンボル。

○深巷―奥まった路地。○四科―人物を評価する四つの徳目。

(德行・言語(言論)・政治・文学(學術))。○亦た好事の人有り―

『漢書』「揚雄伝」に、「時に好事なる者有り。酒肴を載せて従い

て游学す」とあるのによる。

\* 五言古詩、一韻到底：姿・蘿・多・磨・蛾・窠・花・波・歌・

陀・阿・軻・科・過・何

〔叢書「外集詩注」巻一、庫本「外集」巻一、『全集』第二冊「外

集」巻一、『全宋詩』巻九九九黃庭堅二)〕

春、雨後のハイキングはじつに楽しそう。酒を飲むと

勃然と湧いてくる詩情。しかし、それは浮かれ心からの

ものではない。このうら若き年で、魏・晋詩のごとき趣

き、人生のはかなさをただよわすのである。陶淵明は

「中觴(ちゆうしやう)遙かなる情を縦にし／彼の千載の憂いを

忘る」(「斜川に遊ぶ」序)と詠んだが、それを意識した

のだろう。人生を悟ったがごとき早熟の人だった。短い

人生なら、名譽や声望など求めるだけ空しい。それより

も行楽に来て酒を楽しむがまし。―そうしてこの詩を書

くのである。このインテリジェンスな酔境が、畢卓・

劉伶らとは異なる。陶淵明を愛読し、杜甫の詩も踏ま

えられている。また歐陽修の詩風を学習している点、お

よび『文選』との関連も注意される。

これを見ると、父を亡くして叔父に預けられた少年黄

庭堅は、存外、天真爛漫で活発な男子だったことが分か

る。それもただの天衣無縫というのではなく、インテリ

ジェンスな天真さなのである。世の中の辛苦や矛盾を、

彼がはや大きく包み込むものを有していた様子が知れる

のは、じつに興味深い。その深い智慧の源泉がどこから

来るのだが、私としては先天的なものよりも（それは当然ある）、むしろ読書によって修得していったという面に重きをおきたい。彼自身、「後人、読書少なし」（『洪甥駒父に答う』『全集』正集卷十八）と、後天的な学習の意義を強調しているからである。

なお日本の抄本類は「内集詩注」本のため、この詩を載せず。

ちなみに、同様の詩に次例あり（「詩外集補」卷一）。

「新寒餞南歸客」「新寒にて南帰の客を餞す」

往在江南最少年 往かて江南に在り 最少年

萬事過眼如鳥翼 万事 眼を過ぐるごと 鳥翼の如し

夜行南山看射虎 夜 南山を行き 射虎を看

失脚墜入崖底黑 脚を失いて 崖底の黒きに墜入するも

卻攀荆棘上平田 却かつて荆棘を攀じ 平田に上る

何曾悔念身可惜 何ぞ曾て悔念せんや 身の惜しむべきを

辭家上馬不反顧 家を辞し馬に上り 反顧せず

談笑據鞍似無敵 談笑 鞍かに抛り 敵無きに似たり

夜、山に登ったり、虎狩りを見たり、また真つ暗な崖に落ちたり、そこから這い上がって、今度は馬に乗ったりと、まさに腕白小僧の様である。

また叔父で黄襄（聖謨、十九叔父、台源先生）という高潔な隱士の存在も影響しただろう。二十二歳の頃、詩の応酬を多く行っており、右詩と共通する詩情が豊かに流れている。が、それは後の稿に取り上げることとして、今は触れないでおく。

## 五 脱俗的世界の賛美——天真爛漫な心

○仁宗・嘉祐六（一〇六二）年、十七歳

「清らかな江の歌」

「清江引」

川面には カモメが ゆらゆら 江鷗揺蕩荻花秋

風に吹かれて 荻の穂も 八十漁翁百不憂

秋の気配を 歌つてる 清曉采蓮來盪槳

今年八十の 老漁師 夕陽收網更横舟

人生百年 憂いなし

羣兒學漁亦不惡

夜の間に 潮が引いたのよ

夜 潮落つ

清らかな 夜明けとともに

老妻白頭從此樂

自分で舟を 漕ぎ出だし

全家醉著蓬底眠

ハスの実採りに 精を出す

舟在寒沙夜潮落

「清江引」

西空が 茜色に染まるとき

江鷗 揺蕩 荻花の秋

一日の網をおさめて

八十 漁翁 百憂えず

岸に横たう 苦舟は

清曉 蓮を采り

波間の夕映えに 溶け合つて

来りて 漿を盪かし

夕陽 網を収め

せがれらも 漁を学んで

更に舟を横たう

なんとも うれしいかぎり

群兒 漁を学ぶ

妻もすつかり 白髪の婆さんだ

亦た悲しからず

けれど これからが楽になろう

老妻 白頭

此れ従り樂し

一家で酔うて 舟底で

全家 醉著して

ゆつくり眠る のどかな暮らし

蓬底に眠り

いつしか 冷たい浜に 舟の影

舟は寒沙に在りて

○引―古い歌の一形式で、押韻・平仄が自由な古体詩となるのがほとんど。○揺蕩―揺れ動く。○荻花秋―白居易「琵琶行」の冒頭に、「潯陽江頭 夜客を送れば／楓葉荻花 秋 素索」という。○百不―全くしない。

杜甫の「徐卿の二子の歌」(上元二年、成都での作)に、

「吾知る 徐公 百も憂えず」(「吾知徐公百不憂」『杜詩詳注』卷十)という。徐卿(西川兵馬使の徐知道のこと)

か)の二人の子が、立派な才能・資質を持っていて、「満堂の賓客 皆 頭を回ら」したという内容で、父から子への

世代交代がうまく行きそうな状況であり、何の心配もないと、杜甫が社交辞令を述べたもの。黄庭堅はこれを意識し

て、この漁師一家はお世辞でなくまさにそうであると感じ

するか。○盪漿―盪は動かす。漿はかい。舟をこぐこと。

杜甫の「城西の陂に舟を泛ぶ」詩に、「小舟の能く漿を盪かす有らずんば／百壺 那ぞ送らむ 酒 泉の如くなる

を」(『杜詩詳注』卷三)、また「閩水歌」に、「巴童 漿を盪かして 担側して過ぎ／水鶏 魚を銜みて 来去し

て飛ぶ」(同 卷十三)という。前者の詩は、お役人と宮女



の華やかな船遊びを詠んだもの。これに対して、黄庭堅の詩は、清く貧しい漁師の労働を詠む。その根底には、漁師一家の暮らしが「城西」の船遊びに比べて、本質的な幸福の有り様を示すことへの洞察があると感じられる。○蓬

底—とまの下。晩唐の韓偓(八四二—九二三)の「醉著」詩に、「漁翁 醉 著して 人の喚ぶ無く／午に遇いて醒め来たれば 雪 船に満つ」(「漁翁醉著無人喚／遇午醒来雪 満船」)、杜荀鶴(八四六—九〇四)の「溪興」詩に、「山雨 溪風 釣絲を巻き／瓦甌(素焼きの瓶) 篷底、独り斟む時／酔い来たりて睡 著し 人の喚ぶ無く／流下前溪 也た知らず(「山雨溪風卷釣絲／瓦甌篷底獨斟時／醉來睡著無人喚／流下前溪也不知」という。「醉著」の著は着とも書き「ちやく」と読む。「落着」の着と同じで、決まりがつくのニュアンス。韓杜いずれもささやかな舟の暮らしたが、大らかな時の流れに身を任せて生きる幸福を詠む。

\*七言古詩、韻：秋・憂・舟／惡・樂・落

(叢書『外集詩注』巻一、庫本『外集』巻一、『全集』第二冊「外集」巻六、『全宋詩』巻九九九黄庭堅二一)

黄庭堅が母方の叔父・李常のもとに身を寄せていた

頃のもので、江南のどこかの「清らかな江」か。とある漁師一家の平和な暮らしぶりという設定で描く。

八十歳になるという老漁師だが、何の心配もない暮らし。清らかな夜明け、心静かな澄んだ時間が何とも言えずいい。健康な心身に、充実した気が溢れている。早朝のハスの実採り。さわやかな朝日に包まれながら、川の恵みを採取する。夕陽の落つる頃には、おもむろに網を引き上げ、やがて平穏と休息の時がやってくる。舟を岸に横たえ、侘(わづ)れたちに目を細める翁。代々、受け継がれていく漁法とともに、この命も子から孫へととわに続いていく。長年、辛苦を重ねた老妻へのいたわりの心も温かい。

家族全員、幸せな酒を酌み交わし、心地よい疲労感と深い満腹感のうちに、江の波を揺り籠に舟底にそれぞれを夢を結ぶのだ。舟中の小世界のつつましさに、心がなごむ。夜、潮が引くと、いつのまにか舟は、冷えた砂の上。そして朝がくれば、自然に舟は波の上に身を委ねている。このおらかな自然のリズムとともに、屈託なく生きていく漁民の姿に、若々しい純真さで普遍の在処を

洞察するのである。

これと同内容のことを詠んだのが、「漫尉」（詩外集補）巻一の冒頭部分である。

豫章黄魯直	豫章 黄魯直
既拙又狂痴	既に拙にして 又狂痴
往在江湖南	往て 江湖の南に在り
漁樵乃其師	漁樵 乃ち其れ師
腰斧入白雲	腰斧もて 白雲に入り
揮車棹清溪	揮車(釣車)もて 清溪に棹す
虎豹不亂行	虎豹 亂行せず
鷗鳥相與嬉	鷗鳥 相与に嬉し
遇人不崖異	人に遇うも 崖異(いはる意)せず
順物無瑕疵	物に順いて 瑕疵無し
不知愛故厭	知らず 故を愛することの厭いを
不悔爲人欺	悔いず 人の為に欺かるるを
晨朝常漫出	晨朝 常に漫ろに出で
莫夜亦漫歸	莫夜 亦た漫ろに帰る

この「狂痴」(あくまで本人の意識においてだが)的楽天性、これは青春の特権でもある。黄庭堅とてごく普通の若者だったのである。それはしっかり確認しておきたい。

この頃、黄庭堅が付き合っていた友人に、俞澹(清老)がいる。ともに孫覿(莘老)に従い漣水軍(江蘇省漣水県)に学んだ。清老は俊敏かつ詩に通じていて、黄庭堅の最大の仲良しだった。こんな話が伝わる。「俞澹、字は清老、揚州の人なり。少くして魯直と共に孫莘老に従い漣水軍に学ぶ。魯直、時に年十七八にして、自ら清風客と称す。清老云わく、奇逸にして通脱、真に驥子、地に墜つるなりと。嘗て其の清老に贈りし長歌一篇を見て、今の詩格と絶はだ類せず。李太白を学ぶに似たり。而して書は周越に学ぶと」(葉夢得「避暑録話」上巻『学津討原』所収)。周越は天聖・慶曆年間(一〇二三〜一〇四八)に名前の高かった書家で(11)、黄庭堅の初期の草書体の師である。

清老とはかなり親しかったらしく、その後、何度も言及がある。「書して俞清老に贈る」には、「清老は金華

の愈子中なり。三十年前、余と共に淮南に学ぶ、「又」には、「余、童子の時、学を淮南に就き、金華の愈清老と研席を同じうす。嘗て七言長韻を作り清老に贈る。小児、縄墨無し。放蕩の言なるに、然れども清老、今に至るも班班として能く之を誦んず」(『黄庭堅全集』正集卷二十五)、「愈清老に贈りし詩に跋す」には、「愈清老、<sup>むかし</sup>旧 庭堅と同学にして、才性警敏、能くせざる所無し。事を喜び聞くことも多く、白頭なるも倦まず。諧謔戲弄なるは、則ち孟・東方朔の人と為りに優るに似たり」(同卷二十七)、「愈秀老・愈清老の詩頌に跋す」には、「秀老・清老、皆 江湖の扁舟にて、流俗の人の拘忌・束縛を受くる能わざる人なり。：清老は往て予と共に漣水に学ぶ。其れ万物を傲睨し、滑稽にして世を玩び、白首になるも衰えず」(同)とあるから、黄庭堅の「狂痴」は、この愈清老との共同行為の部分もあったといえよう。また漣水での学友・愈清老とともに従った孫莘だが、当時、李常と親交があり、後に黄庭堅の岳父となる人物である。「始めて孫公を識り、言行の要を聞くを得たり。啓迪勸奨(教導・奨励の意)し、道に嚮かうの方を知らし

むるは、孫公を多と為す。孫公、(余の)少くして立つを憐み、故に(娘の)蘭溪を以て之に帰がしむ(「黄氏二室墓誌銘」『全集』外集卷二十二)とある通りだが、紙数の関係で稿を改めることとする。

鄭永曉氏の『年譜新編』によると、黄庭堅はこの頃、もう一編重要な作品を書いている。「跋奚移文」(『全集』正集卷二十九)という、彼の妹・阿通的嫁ぎ先(李常の長男・李摯)で働く、足なえの召使い(跋奚)について書いた文である。黄庭堅の障害者に対する、ひいては人間全般に対する考え方を述べたもので、少年とは思えぬ思慮をうかがわせる資料として注目される。これに関しては、昨年、岡本不二明氏が的確で、かつ当時の童僕や奴婢の実態、および庭堅の弟・叔達が障害者だったらしいことも含めて、じつに興味深い報告をされている(12)。それをご参照願うこととして、ここでは触れずにおく。

(1) 川瀬一馬『五山版の研究』(日本古書籍商協会 一九七〇)二〇六頁に所蔵先一覽を掲げる。また日本語学の報告としては、高羽五郎編の謄写版『山谷詩集鈔』

(一九七六)一九八〇 丁亥版癸卯本 抄物小系)、大塚光信「山谷抄」(『統抄物資料集成』第十卷 解説・索引編所収 清文堂出版 一九九二)、柳田征司『室町時代語資料としての抄物の研究』(武蔵野書院 一九九八)などがある。斯界の立場から見ると、作品内容を深く取り上げたものではないが、書誌情報としては貴重な報告をしている。

(2) 浅見洋二「黄庭堅詩注の形成と黄齋『山谷年譜』—真蹟・石刻の活用を中心に—」(『集刊東洋学』百号 二〇〇八)、同「校勘から生成論へ—宋代の詩文集注釋、特に蘇黃詩注における真蹟・石刻の活用をめぐる—」(『東洋史研究』六十八巻—一号 二〇〇九)がある。なお以前のものとしては、大野修作「黄庭堅集

のテキスト」(『鹿兒島大学文科報告』十九号 一九八三)、王嵐『宋人文集編刻流伝叢考』(江蘇古籍出版社 二〇〇三)「黄庭堅集」等がある。後者は「伝世宋元刻本」「朝鮮本、日本本」などの章で、日本の文献が紹介されている。

(3) 倉田淳之助「東坡抄と山谷抄」(内田智雄編『米沢善本の研究と解題』所収 ハーバード・燕京・同志社 東方文化講座委員会 一九五八)、岩城秀夫・根ヶ山徹「解題」(『嘯岳鼎虎禪師自筆本 山谷詩鈔 長州毛利洞春寺藏』正宗山洞春寺 二〇〇六)、根ヶ山徹「月舟壽桂講『山谷幻雲抄』考」(『東方学』一一五輯 二〇〇八)等がある。主に書誌情報の面からの報告である。

(4) 住吉朋彦「室町文学に於ける『事文類聚』享受の位相」(『和漢比較文学』十一 一九九三)は、『事文類聚』が唐宋代の詩文・詩話を豊富に採録し、かつ詩文の場合はその全文を引いていることから、当時の禅林に歓迎された旨を詳論していて、有益。なお『事文類聚』の最初の受容は、義堂周信の『空華日用工夫略集』

の永和二年(一三七六)三月十五日の条の例であり、はや十四世紀から始まっている。ただし、住吉論文に拙論で述べた瓢庵と『事文類聚』の関係は、指摘がない。

(5) 注(1)の大塚光信氏の解説、および同氏編『山谷抄』(『続 抄物資料集成』第六卷 一九八〇)がある。

(6) 周裕鍇「黄庭堅家世考」(『中華文史論叢』一九八六—四期)に、「黄氏先世考」があり、黄瞻は正しくは黄瞻である。また彼は六世の祖とされるが、正しくは五世祖である等の考察が示される。これを受けて、楊慶存『黄庭堅与宋代文化』(河南大学出版社 二〇〇二)「黄氏宗系与家学淵源」があり、黄瞻説を支持するが、六世の祖であるとする。楊論では、始祖は玘であり、黄庭堅で七代目となるとする。が今は、鄭永曉本に従い、名前を黄瞻、黄庭堅を六代目としておく。

(7) 黄宝華『黄庭堅評伝』(中国思想家評伝叢書 南京大学出版社 一九九八)四頁。ただし黄注によると、この見解は、詹八言「黄庭堅父子史実考辨」(『九江師專学報』一九八六—第四期)に基づくという。

(8) 『百部叢書集成』七十六、『十万卷楼叢書』第三函

所収。「除是」は、『助字辨略』(清・劉淇)を参照。

(9) 黄啓方『黄庭堅研究論集』(安徽人民出版社 二〇〇五)に、「黄庭堅之父黄庶事跡考」がある。

(10) 張秉権『黄山谷的交游及作品』(中央大学出版社 一九七八)「山谷所受親長的教誨」、白政民『黄庭堅

詩歌研究』(寧夏人民出版社 二〇〇二)「黄庭堅的家世和生平」等が、一般的な記述ながら参考になる。

(11) 陳志平『黄庭堅書学研究』(中華書局 二〇〇六)「黄庭堅書風の形成与演変」が参考となる。

(12) 岡本不二明「黄庭堅「跛奚移文」小考」(『中国文史論叢』第四号 中国文史研究会 二〇〇八)。

付記

黄庭堅抄物文献の調査・収集にあたっては、名古屋市蓬左文庫、慶應義塾大学斯道文庫、京都両足院、米沢図書館等のご理解と御協力を得た。また天理大学図書館蔵『帳中香』は、南山大学図書館所蔵のものを閲覧させていただいた。各機関に深く感謝申し上げる次第です。